様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２０６８

研究課題名（和文）複眼的視点からの大本教研究―データベース構築と国際宗教ネットワークの研究

研究課題名（英文）Oomoto-kyo Studies from Multifaceted Perspectives:Database Construction and the Study of international Network of Religions

研究代表者
対馬　路人（TUSHIMA, Michihito）

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：６０１５０６０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　大本資料室所蔵資料の探索、出口三平氏所蔵資料のデータベース化、三五教関連資料の収集、稲荷講社関連資料の発掘などを通して、大本教およびその関連団体に関する文献並びに他のメディア資料の所在確認、収集、データベース化に一定の成果を挙げた。
　大本教の国際的な宗教ネットワーク形成の実態については、台湾（世界紅卍字会道院）、韓国（普天教など）で現地調査を実施し、関係者へのインタビュー、資料の収集、現地研究者との交流を行い、交流・提携の背景や実態の解明を進めた。同時に19世紀末から20世紀前半の東アジア地域の新宗教運動についての資料・情報の収集に努めた。

研究成果の概要（英文）：The confirmation of place,collection and creating database of written materials and other media materials about Oomoto-kyo and related groups were advanced through searching materials of Oomoto-shiryousitu ,craeating databese of Deguchisanpei-collection , collecting of written materials about Ananai-kyo and discovering of written materials adout Inari-kousha.
 Concerning the international network formation between Omoto-kyo and other religious groups,we brought to clarify the background and real saete of interchange or cooperation by fieldworks of Taiwan(Sekaikomanjikai-Doin) and South Korea(Futen-kyo). At the same time we endeavored to collect the written materials and informations about East Asian new religions during late 19th century to the first half of 20th century.

研究分野：宗教社会学

キーワード：大本教　東アジア新宗教　トランスナショナリズム　デジタルアーカイブ　宗教協力・連携　霊的宗教運動　千年王国運動

１．研究開始当初の背景

天理教や大本教をはじめとする日本新宗教に関する研究は、1950 年代末以降に村上重良、安丸良夫、ひろたまさきら歴史学者によって推進された民衆宗教史研究、またその成果を批判的に継承した宗教学・宗教社会学における新宗教研究によって大きく進展した。そこでは、思想史的・文化史的に価値の低いものとして顧みられなかった新宗教の思想や実践を、民衆自身が培ってきた世界観や社会観、また人間観を表すものとして積極的に評価し、当事者の論理に即して理解したうえで、歴史的文脈に位置づけなおす作業が行われた。その成果は、大本七十年史編纂会編『大本七十年史』(宗教法人大本、1964/1967 年）や井上順孝他編『新宗教事典』(弘文堂、1990 年）をはじめとした多くの著作として結実している。

これらの諸研究によって、新宗教諸教団の歴史・教義・組織・実践などについての知識は飛躍的に増大したが、いくつかの課題が残されている。第一に、各研究者が個別的に探索・収集してきた新宗教に関する史資料は、体系的に整理されてきたとはいえない。重要な教典や教義書類については各教団が公刊したり、研究者が史料集にまとめたりしてきたものの、近代出版技術の発達とともに大量に制作された機関誌類やパンフレットなどは、多くが所在の確認もなされないままになっている。だが、大本教のような新宗教教団は、新聞・雑誌・映画・レコードなど最新のメディアを駆使して国内外に広汎なネットワークを築きながら宗教活動を行っていたのであり、これらの史資料を体系的に収集・整理することは、今後の新宗教研究にとってきわめて重要な課題となる。また、日本国内の他の新宗教活動や霊術との広範な交流があったことも大本教の特徴の一つであり、そのような連携団体の資料調査も重要である。研究代表者である對馬路人が解説を寄せた、大本教の機関紙のひとつ『人類愛善新聞』の復刻（不二出版、2012-2013 年）は近年の重要な成果だが、継続して資料の発掘・整理を行う必要がある。

第二に、20 世紀における大本教と他の教団や民間信仰との交流のあり方を近代東アジア史のなかで明らかにすることも、重要かつ未開拓の課題である。新宗教の国境を越えた活動については、井上順孝『海を渡った日本宗教』（弘文堂、1985 年）や李元範・櫻井義秀編『越境する日韓宗教文化』（北海道大学出版会、2011 年)、武内房司編『越境する近代東アジアの民衆宗教』(明石書店、2011 年）などの研究がある。これらは日本や韓国、中国、台湾などで成立した教団が、外国の社会的・文化的環境のなかでいかなる変容を遂げたのかという、土着化の問題を扱っている。しかし、アジア各地の宗教運動が 19 世紀アメリカのスピリチュアリズムを発端とする 20 世紀初頭のグローバルな霊的潮流にどう刺激され、またどのように主体的に国際ネットワークを構築していったのかという点については十分な研究はない。その中で研究分担者の永岡崇も参加した京都大学人文科学研究所での公開ワークショップ「神の声を聴く――カオダイ教、道院、大本教の神託比較研究」（2014 年 6 月 28 日）において、トランスナショナルな宗教運動の視点からの研究方向が示され、本科研プロジェクトにつながっている。大本教は中国の道院やベトナムのカオダイ教だけでなく、さらに朝鮮の普天教、イランで発生したバハーイ教などと提携して世界的な宗教ネットワークを構想したのであり、これらの実態把握と歴史的意義の解明が待たれている。

第三に、宗教学研究が決して無色透明の事実の羅列ではなく、研究者の視点や価値観によって再構築されたものであることはすでに学会の通説と化しており、大本教研究においても、すでに研究分担者の永岡の「宗教文化は誰のものか―『大本七十年史』編纂事業をめぐって」(『日本研究』47 号、2013 年）が分析しているように、強い思想性を持ったものであった。それらを批判して相対主義のニヒリズムに陥るのではなく、宗教研究にふさわしい新しい「大きな物語」を構想できるのかが問われている。

２．研究の目的

戦後日本の新宗教研究は質量ともに充実したものであり、1990 年前後を頂点として発展してきた。しかし、ここ 20 年ほどの新宗教研究の低迷は否めない。一方で、アジア的視野からの日本近代史の再叙述、他方で新たな資料の復刻など、新宗教研究も方法と資料の両面で見直しを迫られている。本研究では、近代日本を代表する新宗教である大本教に焦点を合わせ、つぎのような研究目的を設定した。

（１）大本教の史資料に関するデジタルアーカイブの構築（ミクロ視点）
（２）東アジア宗教史に連動させ、より広い視野から大本教の歴史を叙述し直すことによる、戦前日本の精神史、宗教史の書き換え（マクロ視点）
（３）以上の成果を利用して、従来の新宗教研究を全面的に見直し、方法論的に新たな新宗教研究の枠組みを提示すること

３．研究の方法

本研究では、新宗教をめぐる戦後の宗教学的・歴史学的研究の達成と限界をふまえ、東アジアを代表する新宗教のひとつである大本教に関連する資史料の収集・整理、データベース化を行うとともに、それらの資史料を駆使して大本教の成立と展開、国際的新宗教ネットワークの形成とその思想、また領域横断的な宗教運動の実態とその思想について、比較宗教学的・文化交流史的観点から明らか

にする。

このような課題を掲げるうえで、主要な対象として大本教を取り上げるのには戦略的な理由がある。まず、大本教については『大本七十年史』をはじめ、新宗教のなかでももっとも豊富な研究成果が蓄積されているが、そのために資料面と方法面での限界も明らかであり戦後新宗教研究の成果を批判的に整理しなおすうえで、きわめて重要な位置を占めることである。つぎに、大本教は政治・芸術・農業などさまざまな分野に活動を広げるとともに、東アジアの諸新宗教とも連携をはかり、国際的な宗教ネットワークを形成していたことも重要である。さらに王仁三郎の思想にはスウェーデンボルグ思想や神智学などの欧米の霊的思想の影響も少なくない。そして、さまざまなメディアを積極的に用いた布教戦略を取っていたことから、近代新宗教に関する資史料の広がりを示す典型的な事例になると考えられることも指摘できる。

以下、具体的な作業課題を示す。

（1）『直霊軍』『敷島新報』などの未復刻の機関誌、『彗星』のような連携団体の機関誌の所在調査など、『大本七十年史』、また池田昭編『大本史料集成』などで言及されながらも、その所在や内容などについて充分明らかになっていない冊子、単行本類、大本教の出版物や映画、レコード、さらに手稿類に至るまで、可能な限りすべてを探索し、目録を作成する。この微視的な作業によって教派神道、国家神道体制、超国家主義との関係などに新たな光をあて、大本教の発生→展開→国家権力による弾圧→復興という歴史的プロセスを見直すことができよう。

（2）大本教の事例を東アジア宗教史との比較、歴史的な相互関係の中で検討することで、（1）で得た資料を読み直す。西欧の霊的思想の流行や他の新宗教の展開過程をも検討しながら、東アジアの新宗教史を描きなおすと同時に、大本教をよりグローバルな視点からとらえ直す。

（3）以上の歴史的な研究検討を踏まえつつ、戦後の新宗教研究を規定してきた価値規範や社会的文脈を明らかにし、宗教研究者と当事者との関係を含めて、方法論的な考察を行うことで、新たな新宗教学研究の方向を切り開く。

4．研究成果

平成 27 年度は、まず大本教関連資料の収集作業と、戦後新宗教研究の学問史的検討に注力した。京都府亀岡市の大本本部には教学研鑽所が設置されており、教団史研究のため多くの資料が保管されているが、必ずしも十分な目録作成や分析は行われていない。そこで、本研究において、所属資料の全体像の把握に努めている。また、大本の地方分院や公共図書館、他宗教団体などが所蔵している資料についても調査を行い、20 世紀前半に大本教が刊行した文書・画像・音声・映像資料、および大本教について書かれた新聞・雑誌記事や研究論文などの情報を収集している。

次に、研究代表者・分担者・協力者などで構成する共同研究会を 4 回開催し、そこで大本教の教団史『大本七十年史』を批判的に検討した。それを通じて、戦後の歴史学者の宗教観・歴史観を理解するとともに、史資料の調査結果の報告について議論を行った。具体的には、第一次・第二次大本事件に関わって、『七十年史』の歴史叙述の問題点と新たな課題の発見を行うとともに、神道天行居や天理教など、大本教と密接な関係を持つ諸教団との比較検討を行った。この研究会を起点として、ドイツやアメリカ、韓国など各国の新宗教研究者とのネットワークを形成することもできた。

また、中国の紅卍字会道院やベトナムのカオダイ教における神託儀礼と大本教の鎮魂帰神法の比較を通じて、近代東アジアで霊魂との交流の技法がどのように展開してきたかについて考察を行った。さらに、大本教における「皇道」概念の形成過程をたどるとともに、その歴史的特徴を検討した。これらの成果は、『人文學報』108 号（京都大学人文科学研究所、2015 年）に発表し、大本教研究の新たな局面を開くことができた。

平成 28 年度は共同研究会を 3 回開催し、研究課題についての報告や研鑽を行った。6 月 4 日～5 日に京都府亀岡の大本天恩郷を訪れ、大本関係者と研究会を実施し、研究上のさまざまな課題について意見を交換した。また京都大学人文科学研究所共同研究「日本宗教史の再構築」の研究会にも参加し、研究成果を報告した。

また、日本宗教学会の第 75 回学術大会では、研究分担者の永岡を代表者として研究課題に関連するパネル「宗教の時代としての 1930 年代—メディア・博覧会・反宗教」を企画し、報告を行った。

データベースの作成については、大本資料室での文献検索、調査に加え、元大本教学研鑽所研究員の出口三平氏の所蔵資料の整理を進めた。さらに大本の昭和期の社会運動団体「昭和青年会」の機関誌『（昭和）青年』の復刻、出版（不二出版）に向けて作業を進めた。

海外の宗教とのネットワークづくりに関して、大本の系譜を引く三五（あなない）教が戦後に展開した「世界宗教会議」に関して、資料の収集を行った。また、對馬は 9 月に台北の世界紅卍会道院台湾総院を訪れ、大本との提携に関する聞き取り、および資料収集を行った。

研究代表者の對馬は大本教が昭和前期に展開した主要な宗教・社会運動のうち、「人類愛善」のスローガンを掲げ海外の宗教との協力・提携運動を展開した「人類愛善会」の活動、及び愛国的な挙国更生運動を展開した「昭和青年会」の運動について、資料収集および分析に努めた。研究分担者の川瀬貴也は、

植民地朝鮮における国家神道政策との関連で、大本を含む日本宗教の布教活動について資料収集、分析を進めた。永岡は 1930 年代の大本の博覧会活動を中心に、大本の「愛善主義」と「国家主義」の表象について分析を進めた。研究分担者の吉永進一は出口王仁三郎の『霊界物語』の宗教思想における西洋の心霊思想、特にスウェーデンボルグの影響について解明を進めた。

平成 29 年度は、共同研究会を 4 回実施し、研究課題についての報告や研鑽を行った。研究分担者である川瀬を中心に、日本宗教学会第 76 回学術大会においてパネルセッション「近代日韓の宗教運動の「変容」」を組んだ。また代表者對馬と分担者の川瀬、永岡および研究協力者が、戦前の大本と交流した韓国の「普天教」の跡地、および韓国の代表的な新宗教教団の本部を見学し、教団の出版物などの資料を収集した。さらに研究協力者の吉永が、出口王仁三郎の霊学の師である長澤雄楯、兄弟弟子にあたる宮城島金作についての新たな史料を発見した。3 年間の研究成果のまとめとしてシンポジウム「トランスナショナルな大本研究をめざして」を開催した。

研究期間全体を通じて、まず（1）『大本七十年史』に代表される既存の大本教研究、新宗教研究を批判的に検討することにより、それらが抱える一国史観や教祖中心主義、ビリーフ中心主義といった問題を浮き彫りにし、新たな課題を明確にする、（2）大本の教団内外に存在する多様な史料の探索を行い、目録を作成することで、研究の視野の拡大をはかる、（3）大本教が展開してきた海外での活動、国際的提携活動に焦点をあわせて探求することにより、トランスナショナルな新宗教研究の可能性を探る、という 3 つの観点から多くの成果をあげることができた。

これらの取り組みは、近代主義的なバイアスを乗り越えて新たな地平を開こうとする近年の近代宗教史研究の諸成果に呼応しつつ、そこに厚みや多様性をもたらす重要な意義をもっているということができる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 23 件）

①對馬路人「コーディネートされる宗教—近現代日本における「世俗的宗教コーディネーター」の台頭は伝統宗教と人々の関わりに何をもたらすか—」、『関西学院大学社会学部紀要』査読なし、128 号、2018 年、37-56

②對馬路人、「書評　平山昇『初詣の社会史—鉄道が生んだ娯楽とナショナリズム』」、『宗教研究』、査読なし、91 巻 3 号、2017 年、114-120

③永岡崇、「民衆宗教研究の現在—ナラティヴの解体にむきあう」、『日本思想史学』、査読なし、49 号、2017 年、54-67

④永岡崇、「近代日本と民衆宗教という参照系—安丸良夫における「論理」と「活力」」、『日本史研究』、査読なし、663 号、2017 年、42-62

⑤Nagaoka Takashi, “Revisiting the Rush Hour of the Gods: The People’s Religions of *Après la Guerre* and Postwar Japan,” *Asian Journal of Religion and Society*, 査読なし, 5 巻 2 号, 2017 年、91-120

⑥吉永進一、「*Hansei Zasshi* と大拙」、『松ヶ岡文庫研究年報』、査読なし、31 号、2017 年、65-77

⑦吉永進一「大拙研究の新展開」、『アンジャリ』、査読なし、34 号、2017 年、26-39

⑧岡田正彦、吉永進一「近代仏教とメディア」、『中外日報』、査読なし、120 年記念号、2017 年、22-23

⑨川瀬貴也、「書評　青野正明『帝国神道の形成－植民地朝鮮と国家神道の論理』」、『日本歴史』、査読なし、819 号、2016 年、111-113

⑩永岡崇、「書評　塚田穂高『宗教と政治の転轍点－保守合同と政教一致の宗教社会学』」、『近代仏教』、査読なし、23 号、2016 年、193-197

⑪永岡崇、「書評　岩田文昭『近代仏教と青年—近角常観とその時代』/碧海寿広『近代仏教の中の真宗—近角常観と求道者たち』」、『宗教と社会』、査読なし、22 号、2016 年、43-46

⑫永岡崇、「青野正明『帝国神道の形成—植民地朝鮮と国家神道の論理』を読む」、『東アジアの思想と文化』、査読なし、8 号、2016 年、184-191

⑬伊藤聡、昆野伸幸、斎藤英喜、永岡崇、「討議　歴史としての神道—神道の可能性をめぐって」、『現代思想』、査読なし、45 巻 2 号、2016 年、172-198

⑭吉永進一、「松ヶ丘文庫に収蔵された Mahayanist 誌について」、『松ヶ丘文庫研究年報』、査読なし、30 号、2016 年、63-75

⑮吉永進一、フィリップ・デリップ、「ヨーガとニューソート—松ヶ丘文庫未整理資料から発見されたバラティの手紙をめぐって」、『松ヶ丘文庫研究年報』、査読なし、30 号、2016 年、93-117

⑯吉永進一、「近代の宗教都市、清水」、『季刊清水』、査読なし、49 号、2016 年、8-19

⑰永岡崇、「教祖の家族写真をめぐる覚え書」、『Cultures/Critiques』、査読なし、別冊、2016 年、378-390

⑱對馬路人、「コメント１－水口勇太「皇道大本の思想と行動」へのコメント」、『人文學報』、査読なし、108 号、2015 年、113-116

⑲對馬路人、「書評　塚田穂高著『宗教と政治の転轍点－保守合同と政教一致の宗教社会学』」、『宗教と社会』、査読なし、22 号、2015 年、88-91

⑳川瀬貴也、「植民地朝鮮における宗教政策と日朝仏教－一九二〇年代から三〇年代を中心に」、『宗教研究』、査読あり、89 巻 2 号、2015 年、217-241

㉑永岡崇、「書評　村上興匡・西村明編『慰霊の系譜—死者を記憶する共同体』」、『近代仏教』、査読なし、22 号、2015 年、75-77

㉒永岡崇、「ソウルメイトは二重橋の向こうに—辛酸なめ子における皇室とスピリチュアリティ」、『人文學報』、査読あり、107 号、2015 年、103-129

㉓永岡崇、「霊魂をとらえ損ねる—神の声から考える民衆宗教大本」、『人文學報』、査読なし、108 号、2015 年、143-158

〔学会発表〕（計 9 件）

①永岡崇、「〈民衆宗教ナショナリズム〉の変容—アジア・太平洋戦争期における天理教と行政」、第 71 回神道宗教学会学術シンポジウム「昭和戦中期の行政と宗教・神社」、2017 年 12 月 2 日、國學院大學

②永岡崇、「民衆宗教、あるいは帝国のマイノリティ」、日本思想史学会創立 50 周年記念シンポジウム、2017 年 10 月 29 日、東京大学

③川瀬貴也、「「近代（的）仏教」の語られ方—雑誌『朝鮮仏教』より—」、日本宗教学会第 76 回学術大会、2017 年 9 月 17 日、東京大学

④Nagaoka Takashi, “Imperial Japan and New Religion: Modernity as Religiously Experienced,” 15th European Association for Japanese Studies International Conference, 2017 年 9 月 1 日, リスボン新大学、ポルトガル

⑤永岡崇、「モダニティとしての新宗教—迷信・宗教・帝国」、京都大学人文科学研究所共同研究「日本宗教史像の再構築」第 25 回研究会「「日本の近代化と宗教」を捉え直す」、2017 年 3 月 20 日、京都大学

⑥吉永進一、「霊肉救済・霊俗融合—精神療法家、渡辺藤交」、ワークショップ「日本心霊学会から人文書院へ　新資料調査の中間報告」、2016 年 12 月 17 日、京都大学

⑦對馬路人、「大本教の文書メディア戦略」、日本宗教学会第 75 回学術大会　パネル「宗教の時代としての 1930 年代—メディア・博覧会・反宗教」、2016 年 9 月 11 日、早稲田大学

⑧永岡崇、「1930 年代の大本と博覧会の思想」、京都大学人文科学研究所共同研究「日本宗教史像の再構築」第 20 回研究会「宗教とメディアの 1930 年代」、2016 年 8 月 19 日、京都大学

⑨永岡崇、「民衆宗教と 1940 年代」、「宗教と社会」学会第 23 回学術大会、2015 年 6 月 14 日、東京大学

〔図書〕（計 6 件）

①赤松徹真編、藤原正信、吉永進一、近藤俊太郎、中西直樹、『『反省会雑誌』とその周辺』、法藏館、2018 年、380 頁(59-75)

②Emily Anderson ed, Maxey, Trent E., Kawase, Takaya, Evon, Gregory N., Kim, Hwansoo, Young, Carl, Wells, Kenneth, Klautau, Orion, Yamakura, Akihiro, Jorgensen, John, Matsutani, Motokazu, Mullins, Mark R., *Belief and practice in Imperial Japan and Colonial Korea*, Palgrave macmillan, 2017, 258p.(19-37)

③井上章一編、長田俊樹、瀧井一博、藤原貞朗、高木博志、小路田泰直、永岡崇、斎藤成也、玉木俊明、荒木浩、安田敏朗、関幸彦、若井敏明、今谷明、鶴見太郎、上村敏文、竹村民郎、『学問をしばるもの』、思文閣出版、2017 年、380 頁（95-109）

④小澤実編、馬部隆弘、三ツ松誠、永岡崇、長谷川亮一、石川巧、高尾千津子、山本伸一、津城寛文、齋藤桂、前島礼子、庄子大亮、『近代日本の偽史言説—歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー』、勉誠出版、2017 年、375 頁（90-120）

⑤大谷栄一、吉永進一、近藤俊太郎編、『近代仏教スタディーズー仏教からみたもう一つの近代』、法藏館、2016 年、298 頁（v-

ix,55-66,179-185,211-212)

⑥永岡崇、『新宗教と総力戦－教祖以後を生きる』、名古屋大学出版会、2015 年、368 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
對馬　路人（TSUSHIMA,Michihito）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：60150603

(2)研究分担者
川瀬　貴也（KAWASE,Takaya）
京都府立大学・文学部・准教授
研究者番号： 30347439

(3)永岡　崇（NAGAOKA,Takashi）
佛教大学・研究推進部・特別研究員
研究者番号：30725297

(4)吉永進一（YOSHINAGA,Shinichi）
舞鶴工業専門学校・人文科学部門・教授
研究者番号：90271600
（H29 年度より：研究協力者）